

明治期に建設された灯台における 景観認識の過程に関する基礎的研究

柴田 翔伍¹・二井 昭佳²

¹ 非会員 国士舘大学大学院工学研究科建設工学修士課程

(〒 154-8514 東京都世田谷区世田谷 4-28-1, E-mail:sOme210k@kokushikan.ac.jp)

² 正会員 工博 国士舘大学理工学部 講師

(〒 154-8514 東京都世田谷区世田谷 4-28-1, E-mail:nii@kokushikan.ac.jp)

本論文では、明治期に建設され現在広く認知されている灯台を対象として、当時の案内書を分析することで、灯台が注目されるようになるきっかけやその景観認識の変化について考察した。その結果、①灯台が注目されるようになったきっかけは灯台周辺の名所と結びついたことによること、②灯台の景観認識には、灯台の存在理由の認識（未風景）、塔への置換、伝統的な風景や立地地形との組み合わせといった試行錯誤（風景の発見）、厳しい自然環境との対比（風景の定着）という3つの段階が存在することを指摘した。さらに、最後の段階が灯台を擬人的に捉えることを可能にしたことも指摘した。

キーワード：明治期の灯台、景観認識、案内書

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

全国各地にある灯台には、現在、観光名所になっているものも多く、そのなかには地域のシンボルとして認知されているものもある。しかし、そもそも灯台は海上交通の安全を支えるために造られた実用的な構造物であり、そうした灯台が竣工当時から景観認識の対象となっていたのか、あるいはなんらかのきっかけを経て景観認識の対象に至ったのかを知ることは興味深い。

しかし、これまで灯台に関する調査や研究は、建築史・土木史的な観点から、灯台を日本の近代化過程の重要な建造物と位置づけ、灯台やそれに付随する建築物の計画・設計思想を追跡したものがほとんどである。それらの成果によって、全国的な灯台建設の概要¹⁾や、明治初期の灯台建設に多大な功績を残したR.H. ブラントンなどの設計思想²⁾などが明らかにされているが、灯台に対する人々の景観認識にかかわる研究の取り組みは少ない。そうした観点からのアプローチとして、大槻・桜井³⁾は、千葉県野島崎灯台を対象に、宿泊施設のパンフレットや広報誌を用いた分析をおこなっているが、テキストの年代が1970年以降のものであり、灯台建設初期からの灯台の景観認識の過程を明らかにするものではない。

そこで本研究では、明治期に建設された灯台を対象と

して、当時の案内書における記述の有無やその内容を分析することで、灯台が注目されるようになるきっかけや灯台の景観認識のされ方やその変化についての知見を得ることを目的とする。

(2) 研究の対象と方法

研究対象の灯台は、日本に洋式灯台が持ち込まれた明治期に建設された灯台で、かつ現在広く認知されているものが適していると考えた。そこで、日本燈台史に記載されている明治期の主要な灯台90基のうち、1998年に海上保安庁が「第50回灯台記念日」の行事として一般市民からの投票によって選定した「日本灯台50選」に該当する灯台33基とした(表-1)。また、分析資料は、灯台に対する当時の景観認識を最も反映していると考えられる案内書とし、その期間は灯台が初点灯する明治2年から昭和20年までを対象とした。

研究の方法は、まず①灯台に対する当時の関心の度合いを掴むために、全国的な範囲を紹介している案内書における対象灯台33基の記述の有無を調査し、その掲載傾向を把握した。その後、②①で特に記述の多かった灯台を対象として、灯台の存在する地域だけについて紹介している案内書も分析対象に加え、案内書の記述内容について分析をおこない、灯台の景観認識の過程について考察した。

表-1 研究対象灯台

| No | 名称 | 所在地 | 初点灯月日 |
|----|------------|----------|----------|
| 1 | 観音埼灯台 | 神奈川県横須賀市 | 明治2年1月 |
| 2 | 野島埼灯台 | 千葉県南房総市 | 明治2年12月 |
| 3 | 神子元島灯台 | 静岡県下田市 | 明治3年11月 |
| 4 | 石廊崎灯台 | 静岡県南伊豆町 | 明治4年8月 |
| 5 | 佐多岬灯台 | 鹿児島県南大隅町 | 明治4年10月 |
| 6 | 部埼灯台 | 福岡県北九州市 | 明治5年4月 |
| 7 | 安楽埼灯台 | 三重県志摩市 | 明治6年4月 |
| 8 | 菅島灯台 | 三重県鳥羽市 | 明治6年7月 |
| 9 | 潮岬灯台 | 和歌山県串本町 | 明治6年9月 |
| 10 | 白洲灯台 | 福岡県北九州市 | 明治6年9月 |
| 11 | 御前崎灯台 | 静岡県御前崎市 | 明治7年5月 |
| 12 | 犬吠埼灯台 | 千葉県銚子市 | 明治7年11月 |
| 13 | 角島灯台 | 山口県下関市 | 明治9年3月 |
| 14 | 尻屋埼灯台 | 青森県東通村 | 明治9月10日 |
| 15 | 金華山灯台 | 宮城県石巻市 | 明治9年11月 |
| 16 | 納沙布岬灯台 | 北海道根室市 | 明治10年5月 |
| 17 | 大瀬埼灯台 | 長崎県五島市 | 明治12年12月 |
| 18 | 祿剛埼灯台 | 石川県珠洲市 | 明治16年7月 |
| 19 | 宗谷岬灯台 | 北海道稚内市 | 明治18年9月 |
| 20 | 襟裳岬灯台 | 北海道えりも町 | 明治22年6月 |
| 21 | 落石岬灯台 | 北海道根室市 | 明治23年10月 |
| 22 | 恵山岬灯台 | 北海道函館市 | 明治23年11月 |
| 23 | 男木島灯台 | 香川県高松市 | 明治28年12月 |
| 24 | 入道埼灯台 | 秋田県男鹿市 | 明治31年11月 |
| 25 | 地藏崎(美保関)灯台 | 島根県松江市 | 明治31年11月 |
| 26 | 経ヶ岬灯台 | 京都府京丹後市 | 明治31年12月 |
| 27 | 室戸岬灯台 | 高知県室戸市 | 明治32年4月 |
| 28 | 塩屋埼灯台 | 福島県いわき市 | 明治32年12月 |
| 29 | 稚内灯台 | 北海道稚内市 | 明治33年12月 |
| 30 | 銚子岬灯台 | 岩手県宮古市 | 明治35年3月 |
| 31 | 出雲日御崎灯台 | 島根県出雲市 | 明治36年4月 |
| 32 | 水の子島灯台 | 大分県佐伯市 | 明治37年3月 |
| 33 | 神島灯台 | 三重県鳥羽市 | 明治43年5月 |

降になると、場所の詳述な記述がおこなわれるように変化する(図-2)。しかし、それでも明治28年までは灯台が掲載される頻度は低く、その後少しずつ高くなっていくものの、いずれかの灯台がほぼ必ず掲載されるようになるのは明治末期になってからである。さらに、ある時期を境に、それまで掲載されていなかった灯台が掲載されるようにもなっていない。

以上のことから、今回の分析対象の期間においては、灯台という構造物自体が地域の見どころとして認識されていたわけではなく、むしろなんらかの特徴を有する特定の灯台だけがそれとして認識されていたと考えられる。さらに、そうした灯台においても、明治末期以降の掲載数(犬吠埼灯台(22/28件)・野島埼灯台(10/12件))のほうが多くなることから、明治末期に灯台に対する何らかの見方の変化があったのではないかと考えられる。

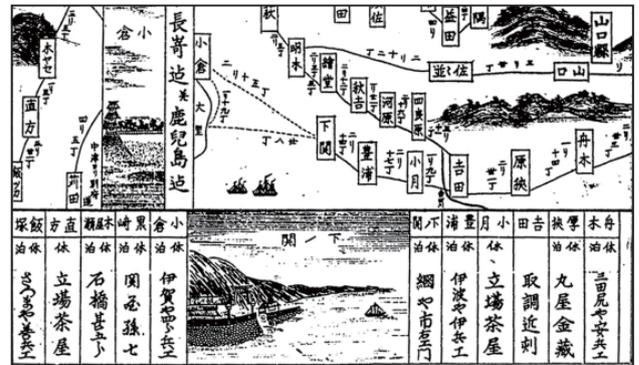


図-1 明治20年『改正大日本道中案内(7)』

2. 全国的な案内書における灯台の掲載傾向

灯台が初点灯する明治2年から昭和20年の期間で、全国的な範囲を紹介している案内書は、全部で72文献ある。そこで対象とした33基の灯台について、これらの案内書における記述の有無を把握した(表-2)。

その結果、各灯台の掲載数にはばらつきがみられた。上位3灯台は、28件の犬吠埼灯台や18件の出雲日御崎灯台、12件の野島埼灯台とそれなりに掲載されているが、それ以外の灯台の掲載数は7件以下であり、一度も掲載されない灯台も10か所あった。

また灯台の記述の有無を年代ごとにもみると、明治21年の『日本名所図解(9)』までは灯台についての記述は存在しなかった。ただ、これは図-1に示すように、それまでの案内書のほとんどが、地図の上に双六のように地名を記し、その一部に絵を挿入したものであり、よほどの名所でない限りは地名しか記載されないことによる。そのため、この時期までは、灯台が地域を代表する名所として捉えられていなかったとはいえるが、灯台が注目されていたかどうかについては判断がつかない。またこうした案内書の体裁は、明治21年の『日本名所図絵(10)』以

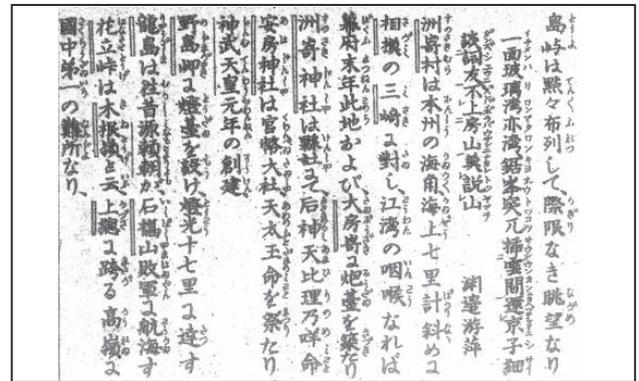


図-2 明治21年『日本名所図絵(10)』

3. 案内書における灯台の記述内容とその変化

(1) 分析の視点

2章で掲載数が多かった野島埼灯台、犬吠埼灯台、出雲日御崎灯台について、さらに灯台の地域だけを紹介している案内書も分析対象に加え、記述内容について分析した。記述内容として注目したのは、周辺地域における灯台の位置づけを判断できる①見出しや灯台周辺の記述順序と、灯台の景観認識のされかたを把握できる②灯台の案内内容である。

(2) 野島崎灯台

野島崎灯台が紹介されている案内書は22件あり、注目した点についてまとめたのが表-3である。

a) 見出し・灯台周辺の記述順序

まず見出しについては、はじめは野島崎やその周辺の地名が用いられていたが、大正14年の『一日二日名勝探りの旅(15)』を境に、野島崎灯台が見出しに用いられるようになる頻度が高くなっている。

また、野島崎灯台周辺で記述される主なものは、野島崎、野島神社である。初期の案内書では、たとえば明治27年の『日本名勝地誌(3)』で「白濱村大字白濱の地角屹として外洋に突出すること凡そ三町許、之を野嶋岬と云ふ、(中略) 岬頭に辨天祠及び燈明臺あり」のように、灯台よりも先に神社が紹介されている。しかし、明治39年の『日本新漫遊案内(6)』には神社の紹介はなく、大正3年の『千葉県案内(9)』では、「野島ヶ崎 白濱村の南岬にして、海上に突出すること凡そ三町、燈臺あり(中略) 上に辨天社あり。」と、神社よりも先に灯台が紹介されている。これ以後、神社が紹介されないか、灯台が神社よりも先に紹介されるようになる。一方で岬と灯台の記述順序は変わらなかった。ただ大正14年以降になると、岬自体の記述がなくなる傾向がみられた。

b) 灯台の案内内容

明治35年の『避暑旅行案内(5)』までは、灯台の案内内容は、灯台の高さや光達距離などの諸元しか記述されていなかった。それが明治39年以降には灯台を視対象として捉える記述が登場するようになる。ただ明治39年の『日本新漫遊案内(6)』では「野島ヶ岬の白色燈臺の高く

天霽を摩せるを認む」とあるように、最初は灯台を単に塔として捉えたものであった。

その後、描写は変化し、明治43年の『新撰名所地誌(7)』は、『日本新漫遊案内(6)』と同じ田山花袋によるものであるが、そこでは「大濤を砕く大洋の風の飛沫と共に陸を嘯む處、白色十数丈の燈台屹立す」と、岬や波しぶきの荒々しさと灯台をセットにした風景描写になっている。こうした描写は、大正7年の『大日本名勝史蹟(12)』や大正8年の『千葉県誌(13)』などにもみられ、次第に定着していく。さらに、大正15年の『房州案内(17)』には、「岬中松林鬱蒼奇岩に怪松を生じ怒濤飛沫となって白雪と砕ける異観、壯觀の中にたつて白亜の野島崎燈臺は聳える又他に求め得ぬ雄大の景色である」、また昭和3年の『大日本百科全集(18)』には「半島の中央に白亜の燈台、颯爽たる姿で聳立しているのも好添景である」と、岬角とセットになった野島崎灯台の風景を称賛する記述が登場する。とくに、『大日本百科全集(18)』では、灯台に対し「颯爽たる姿」と擬人的な表現が用いられている点に特徴がある。

一方、灯台を視点場と捉える記述は、視対象よりも遅く大正14年の『四五日の旅(14)』で初めて登場する。そこには「此の望樓の望遠鏡で覗けば、大島の人家は屋根の瓦の績ぎ目までも判然と見える」とあり、その後も同様の記述が何度かみられた。

c) まとめ

野島崎灯台では、明治43年から大正3年を境に神社と灯台の記述順序が入れ替わることから、この頃から少しずつ灯台の位置づけが高まっていき、見出しに灯台が用

表-3 野島崎灯台を掲載した案内書とその記述

| No | 出版年 | 書名 | 著名 | 見出し | 周辺記述 | 文章表現 | | | | |
|----|------|------------------|-----------|---------|---------|------|-------|------|-------|--------------|
| | | | | | | 諸元 | 灯台視対象 | | 灯台視点場 | その他 |
| | | | | | | | 灯台の立姿 | 岬と灯台 | | |
| 1 | 明治22 | 日本名所図絵 巻2-5 | 上田維曉(文齋) | - | 灯台 | ○ | - | - | - | - |
| 2 | 明治22 | 鼈頭大日本実地真景名所図会大全 | 石橋中和 | 燈臺 | - | ○ | - | - | - | - |
| 3 | 明治27 | 日本名勝地誌 第2-4編 | 博文館 | 野嶋岬 | 岬、神社、灯台 | ○ | - | - | - | - |
| 4 | 明治30 | 安房名勝地誌 | 関屋為性、島海金堤 | 野島岬 | 岬、神社、灯台 | ○ | - | - | - | - |
| 5 | 明治35 | 避暑旅行案内 | 探勝会 | 白濱村海水浴場 | 海水浴場、灯台 | - | - | - | - | 存在のみ |
| 6 | 明治39 | 日本新漫遊案内 | 田山花袋 | 館山町 | 岬、灯台 | ○ | ○ | - | - | - |
| 7 | 明治43 | 新撰名勝地誌 巻1-4 | 田山花袋 | 野島崎 | 岬、灯台、神社 | ○ | - | ○ | - | - |
| 8 | 大正2 | 安房名勝詩集 | 柳園安川文時 | 野島崎 | 岬、灯台 | ○ | - | - | - | - |
| 9 | 大正3 | 千葉県案内 | 千葉県 | 野島ヶ崎 | 岬、灯台、神社 | ○ | - | - | - | - |
| 10 | 大正5 | 日本一周 後編 | 田山花袋 | - | 灯台 | - | - | - | - | 存在のみ |
| 11 | 大正6 | 東房州案内 | 亀田英良 | 白濱村 | 灯台 | - | - | - | - | 存在のみ |
| 12 | 大正7 | 大日本名勝史蹟 | 高木斐川、原坦嶺 | 野島崎 | 岬、灯台、神社 | ○ | - | ○ | - | - |
| 13 | 大正8 | 千葉県誌 巻上、下 | 千葉県 | 野島ヶ崎 | 岬、灯台 | - | - | ○ | - | 存在のみ |
| 14 | 大正14 | 四五日の旅 | 松川二郎 | 北條 | 灯台 | ○ | - | - | ○ | - |
| 15 | 大正14 | 一日二日名勝探りの旅 | 横井春野 | 野島ヶ崎燈臺 | 灯台、海水浴 | ○ | - | - | - | - |
| 16 | 大正15 | 趣味と実用をかねた日本名所めぐり | 大村豊吉 | 野島ヶ崎燈臺 | 灯台 | ○ | - | - | - | - |
| 17 | 大正15 | 房州案内 | 安房振興会 | 野島崎 | 岬、灯台、神社 | ○ | - | ○ | ○ | - |
| 18 | 昭和3 | 大日本百科全集 第1 | 誠文堂 | 白濱・野島崎 | 岬、灯台 | - | - | ○ | - | 颯爽たる姿で聳立してゐる |
| 19 | 昭和5 | 鉄道旅行案内 | 鉄道省 | 野島崎燈臺 | 灯台 | ○ | - | - | - | - |
| 20 | 昭和5 | 日本案内記 関東編 | 鉄道省 | 野島崎燈臺 | 灯台 | ○ | - | - | - | - |
| 21 | 昭和11 | 全名勝温泉案内 | 松川二郎 | 安房白濱 | 岬、灯台 | ○ | - | ○ | ○ | - |
| 22 | 昭和12 | 観光の房州と観音巡礼案内 | 曾根虎之助 | 野島ヶ崎燈臺 | 灯台 | ○ | - | - | - | - |

いられ始める大正14年頃には、野島埼イコール灯台という認識も生まれていたと考えられる。

またその景観認識としては、当初しばらくの間は灯台の役割を紹介するだけであり、とくに景観対象として捉えられていなかった。その後、単に塔として捉える段階を経て、岬の先端で荒々しい岩や波しぶきのなかに立つ灯台という見方になったといえる。この灯台が厳しい自然環境のなかでしっかりと立っているという景観認識が、結果的に擬人的な表現につながったと考えられる。

(3) 犬吠埼灯台

犬吠埼灯台を紹介している記述は47件あり、各記述は表-4に示す通りである。

a) 見出し・灯台周辺の記述順序

見出しについては、ほとんどが犬吠埼や銚子、磯巡りといった周辺の名称であり、野島埼灯台のような変化はみられなかった。

また犬吠埼灯台周辺で記述される主なものは、犬吠埼、海水浴、銚子磯巡り、胎内潜である。初期の案内書では灯台よりも先に記述されていた海水浴が、その後灯台よ

表-4 犬吠埼灯台を掲載した案内書とその記述

| No | 出版年 | 書名 | 著者 | 見出し | 周辺記述 | 文章表現 | | | | | |
|----|------|------------------|--------------|------------|------------------|------|-------|------|------|-------|----------------|
| | | | | | | 諸元 | 灯台視対象 | | | 灯台視点場 | その他 |
| | | | | | | | 灯台立姿 | 白砂青松 | 岬と灯台 | | |
| 1 | 明治22 | 龍頭大日本実地真景名所図会大全 | 石橋中和 | 燈臺 | - | ○ | - | - | - | - | - |
| 2 | 明治29 | 東海名勝眺港案内 | 羽成恵造 | 犬吠ヶ岬 | 海水浴、岬、灯台、胎内潜 | ○ | - | - | - | ○ | - |
| 3 | 明治30 | 総房武鉄道成田案内 | 総房武鉄道成田案内編輯所 | 犬吠ヶ岬 | 海水浴、岬、灯台、胎内潜 | ○ | - | - | - | - | - |
| 4 | 明治31 | 日本全国鉄道名所旅行案内 | 小川寅松 | 銚子 | 灯台、海水浴 | - | - | - | - | - | 存在のみ |
| 5 | 明治31 | 日本全国鉄道名所案内 | 野崎左文 | 犬吠ヶ岬 | 岬、磯巡り、胎内潜、灯台、海水浴 | - | - | - | - | - | 存在のみ |
| 6 | 明治34 | 避暑漫遊旅行案内 | 金尾種次郎 | 銚子 | 磯巡り、灯台、海水浴 | - | - | - | - | - | 存在のみ |
| 7 | 明治35 | 全国漫遊最新名勝案内 | 津田房之助 | 銚子 | 磯巡り、岬、灯台、胎内潜 | ○ | - | - | - | - | - |
| 8 | 明治35 | 避暑旅行案内 | 探勝会 | 銚子港付犬吠岬海水浴 | 海水浴、灯台、胎内潜 | ○ | - | - | - | - | - |
| 9 | 明治36 | 総武鉄道線路案内 | 大塚則明 | 犬吠ヶ岬 | 磯巡り、岬、胎内潜、灯台、海水浴 | ○ | - | ○ | - | - | - |
| 10 | 明治38 | 日本漫遊案内 | 坪谷善四郎 | 海水浴場 | 海水浴、灯台 | - | - | - | - | - | 存在のみ |
| 11 | 明治39 | 日本新漫遊案内 | 田山花袋 | 銚子町 | 灯台、海水浴 | - | ○ | - | - | - | - |
| 12 | 明治42 | 房総名勝案内 | 萩谷金七 | 犬吠ヶ岬 | 磯巡り、岬、胎内潜、灯台、海水浴 | ○ | - | ○ | - | - | - |
| 13 | 明治42 | 鉄道院線道遊覧地案内 | 鉄道院運輸部 | 銚子驛 | 岬、胎内潜、灯台、海水浴 | ○ | - | ○ | ○ | - | - |
| 14 | 明治43 | 日本名勝写生紀行 | 岡野栄 | 銚子 | 灯台 | - | - | - | ○ | - | - |
| 15 | 明治43 | 新撰名勝地誌 巻1-4 | 田山花袋 | 犬吠岬 | 海水浴、岬、灯台 | ○ | - | - | - | - | - |
| 16 | 明治45 | 日本名勝旧蹟産業写真帖 | 西田繁造 | 犬吠岬の燈臺 | 岬、海水浴、灯台 | ○ | - | - | - | - | - |
| 17 | 大正1 | 銚子飯岡旭町近傍遊覧案内 | 岩瀬蕉雨 | 犬吠岬 | 岬、灯台、胎内潜 | ○ | - | ○ | ○ | - | 有名なる犬吠岬燈臺は |
| 18 | 大正2 | 鉄道沿線遊覧地案内 | 鉄道院 | 銚子 | 磯巡り、岬、灯台、海水浴 | ○ | - | ○ | ○ | - | - |
| 19 | 大正3 | 千葉県案内 | 千葉県 | 犬吠岬 | 岬、胎内潜、灯台 | ○ | - | - | - | - | - |
| 20 | 大正3 | 鉄道旅行案内 | 鉄道院 | 銚子 | 磯巡り、岬、灯台、海水浴 | ○ | - | ○ | - | - | - |
| 21 | 大正4 | 鉄道旅行案内 大正4年版 | 鉄道院 | 銚子 | 磯巡り、灯台、海水浴 | - | - | - | - | - | 存在のみ |
| 22 | 大正5 | 鉄道旅行案内 大正5年版 | 鉄道院 | 銚子 | 磯巡り、灯台、海水浴 | - | - | - | - | - | 存在のみ |
| 23 | 大正5 | 日本一周 後編 | 田山花袋 | 磯巡り、灯台 | 磯巡り、灯台 | ○ | - | - | - | ○ | - |
| 24 | 大正6 | 鉄道旅行案内 大正6年版 | 鉄道院 | 銚子 | 磯巡り、灯台、海水浴 | ○ | - | - | ○ | - | - |
| 25 | 大正6 | 銚子及近傍遊覧案内 | 岩瀬蕉雨 | 犬吠岬 | 岬、灯台、海水浴 | ○ | - | - | - | - | 東海の偉観犬吠燈臺は |
| 26 | 大正7 | 大日本名勝史蹟 | 高木斐川、原坦嶺 | 銚子港 | 岬、灯台 | ○ | - | - | ○ | - | - |
| 27 | 大正7 | 鉄道旅行案内 大正7年版 | 鉄道院 | 銚子 | 磯巡り、灯台、海水浴 | ○ | - | - | ○ | - | - |
| 28 | 大正8 | 和歌名所めぐり | 佐佐木信綱 | 犬吠岬 | 岬、灯台 | - | - | - | - | - | 存在のみ |
| 29 | 大正8 | 千葉県誌 巻上、下 | 千葉県 | 犬吠岬 | 岬、灯台 | ○ | - | - | - | - | - |
| 30 | 大正9 | 史蹟名勝天然記念物 前、後編 | 瀬川光行 | 犬吠岬 | 岬、灯台、磯巡り、海水浴 | ○ | - | - | ○ | - | - |
| 31 | 大正9 | 名所とところどころ | 谷口梨花 | 香取鹿島から銚子へ | 磯巡り、灯台 | ○ | - | - | ○ | - | 観覧すべきものである |
| 32 | 大正12 | 関東東羽名勝案内 | 黒岩芳泉 | 銚子磯巡り | 磯巡り、岬、灯台、海水浴 | ○ | - | - | ○ | - | - |
| 33 | 大正13 | 鉄道旅行案内 | 鉄道省 | 銚子 | 磯巡り、灯台、海水浴 | ○ | - | - | - | - | - |
| 34 | 大正14 | 日本名勝旅行辞典 | 大日本旅行会 | 犬吠岬 | 岬、灯台、海水浴 | ○ | - | ○ | - | - | 燈臺のあるを以て知られてゐる |
| 35 | 大正14 | 一日二日名勝探りの旅 | 横井春野 | 犬吠岬 | 磯巡り、岬、灯台、海水浴 | ○ | - | - | - | - | - |
| 36 | 大正15 | 全国名所案内 | 谷口政徳 | 銚子の光景 | 岬、灯台 | - | - | - | - | - | 存在のみ |
| 37 | 大正15 | 趣味と実用をかねた日本名所めぐり | 大村豊吉 | 銚子海岸 | 磯巡り、岬、灯台、海水浴 | ○ | - | ○ | ○ | - | - |
| 38 | 昭和3 | 大日本百科全集 第1 | 誠文堂 | 犬吠岬 | 岬、灯台 | ○ | - | - | ○ | - | - |
| 39 | 昭和5 | 鉄道旅行案内 | 鉄道省 | 磯巡り | 磯巡り、灯台、海水浴 | ○ | - | - | ○ | - | - |
| 40 | 昭和5 | 日本案内記 関東編 | 鉄道省 | 銚子磯巡り | 磯巡り、岬、灯台 | ○ | - | - | - | - | - |
| 41 | 昭和6 | 日本名勝風俗大写真帖 | 忠誠堂編輯部 | 房總の名所 | 灯台 | - | - | - | ○ | - | - |
| 42 | 昭和9 | ガイド旅子 | 中西芳朗 | 銚子 | 岬、灯台 | ○ | - | - | - | - | - |
| 43 | 昭和11 | 全日本旅行案内 昭和11年版 | 中西芳朗 | 銚子 | 岬、灯台 | ○ | - | - | - | - | - |
| 44 | 昭和11 | 日本名所集 | 鉄道省運輸局 | 銚子 | 海水浴、灯台 | - | - | - | - | - | 存在のみ |
| 45 | 昭和11 | 全名勝温泉案内 | 松川二郎 | 犬吠岬 | 岬、灯台 | ○ | - | - | ○ | - | - |
| 46 | 昭和13 | 名所旧蹟案内とその詩・歌・俳句集 | 石川弥太郎 | 犬吠岬 | 岬、灯台 | - | - | - | - | - | 存在のみ |
| 47 | 昭和15 | 銚子商工業内、昭和15年版 | 銚子商工会議所 | 犬吠岬燈臺 | 岬、灯台 | ○ | ○ | - | ○ | ○ | - |

りも後で記述されるようになったりしてはいるものの、全体として野島埼灯台のようにはっきりと順番が入れ替わったとはいえない結果となった。

b) 灯台の案内内容

明治29年の『東海名勝銚港案内(2)』で灯台付近からの眺めについて記述されていることを除けば、明治35年の『避暑旅行案内(8)』までは、その案内内容は灯台の諸元か、その存在しか記述されていない。

しかし明治36年以降になると、野島埼灯台と同様に、灯台を視対象として捉える記述が登場する。明治36年の『総武鉄道線路案内(9)』では「青松白砂一望数十町、極端なる白色の高塔は燈明台なり」と白砂青松と灯台をセットにした描写になっている。また、明治39年の『日本新漫遊案内(11)』では「疎松風に亂れたる處、一基白色の燈臺の高く空を抜けるを見るべし」とあり、野島埼灯台と同様に灯台を塔のように捉えた記述も登場する。その後、明治43年の『日本名勝写生紀行(14)』には、「絶壁の上に聳立する白き燈明台、日に輝きて美はしく霞み』のように、岬と灯台をセットにした描写も登場する。このうち白砂青松と灯台、岬と灯台をセットにした描写は、しばらく並列的にでてくるが、白砂青松のほうは大正4年以降にはほぼみられなくなる。

その一方で、岬と灯台をセットにした描写では、たとえば昭和3年の『大日本百科全集(38)』に「岬角は悉く岩壁を以て成り、海中にも無数の巨岩を亂抽して、岩は高さ概ね百尺を超え、(中略)、浪激する時は、真に巖角も砕けて飛ぶかとばかり凄絶な光景を呈する。岬端に百六十呎の灯台あり」のように、岬や波しぶきの荒々しさがより詳細に描写されるようになっていく傾向がみられた。

さらに、昭和15年の『銚子商工案内(47)』では、「白亜の姿は近代的な風致を調和した碧海の怒涛に倒影して、文化と風景との美を直截に斯くも深く我等に訴えしめる所があるか」や「我國最東端の犬吠崎に毅然として聳立する犬吠燈台」と、灯台が伝統的な風景と結びつき、あらたな風景になっていることを記述すると同時に、灯台を擬人的に捉えている。

また、灯台を視点場と捉える記述は、視対象よりも早く明治29年の『東海名勝銚港案内(2)』には「燈臺に赴き一瞬の下渺たる蒼海を望むも亦壯絶」とあるが、その後はほとんど記述されることがなかった。

c) まとめ

犬吠埼灯台では、見出しやその記述順序におおきな変化はみられなかった。ただ、大正1年の『銚子飯岡旭町近傍遊覧案内(17)』に「有名なる犬吠崎燈臺は、(後略)」、大正6年の『銚子及近傍遊覧案内(25)』に「東海の偉觀

犬吠燈臺は、(後略)」、さらに大正14年の『日本名勝旅行辞典(34)』には「燈臺のあるを以て知られてゐる。」とあることから、大正初期から少しずつ灯台の位置づけは高くなっていったと考えられる。

またその景観認識としては、当初しばらくの間は灯台の役割を紹介するだけであり、とくに景観対象として捉えられていなかった。その後、白砂青松との組み合わせや塔としての見方の段階を経て、最終的には岬の先端で荒々しい岩や波しぶきのなかに立つ灯台という見方に変化したといえる。さらに、野島埼灯台と同様に、こうした景観認識が擬人的な表現につながったと考えられる。

(4) 日御碕灯台

日御碕灯台を紹介している記述は34件あり、各記述は表-5に示す通りである。ただ日御碕灯台は、これまで見てきた二つの灯台よりも竣工時期が遅くその初点灯は明治36年である。そのため、案内書が登場するのも明治39年からとなっている。

a) 見出し・灯台周辺の記述順序

日御碕灯台では、最初の案内書から灯台が見出しとして用いられ、その後もそうした傾向が続く反面、他の二つの灯台とは異なり、岬自体が見出しに用いられることはほとんどなかった。

また灯台周辺で記述される主なものは、日御碕神社、經島(文島)であり、その順序としては、必ず日御碕神社が最初に記述されているが、灯台と經島との記述順序は昭和5年から昭和10年の間に灯台が先に記述されるようになっている。

b) 灯台の案内内容

日御碕灯台では、最初の案内書である明治39年の『島根県名勝誌(1)』から、灯台を視対象として捉える記述が登場しているが、その時期としては野島埼灯台や犬吠埼灯台とほぼ同じである。ここでは、「岬端つくる處、巖然として屹立するものこれを日の岬燈臺とす」とあり、岬と灯台をセットにした描写になっている。その後もそうした傾向が続くが、大正10年以降になると、たとえば大正13年の『島根県案内(19)』で「日御碕燈台は御碕盡頭の断崖の上に屹立せる」のように、灯台が岬端に立っていることをより強調する単語が付け足される傾向がみられた。ただ、日御碕灯台では、野島埼灯台や犬吠埼灯台ほどには、岬や波の荒々しさを描写する記述は存在していなかった。

また灯台を視点場と捉える記述も、当初から存在し、その明治39年の『島根県名勝誌(1)』には「試に最高室に登臨すれば、北海の銀波巖脚を洗ひて、渺茫千里、眼界廣闊、ことに夕陽沈まんとして紅雲海面をやくの大觀

表-5 出雲日御碕灯台を掲載した案内書とその記述

| No | 出版年 | 書名 | 著者 | 見出し | 周辺記述 | 文章表現 | | | |
|----|-------|------------------|-------------|---------|--------------|------|-----------|----------|--------------------|
| | | | | | | 諸元 | 灯台 視点場 | 岬と 灯台 | その他 |
| 1 | 明治 39 | 島根県名勝誌 | 奥原碧雲 | 日の岬燈臺 | 日御碕、神社、灯台 | ○ | ○ | ○ | 雪國西端の一大偉観なり |
| 2 | 明治 41 | 簸川郡名勝誌 | 島根県簸川郡私立教育会 | 日御碕燈臺 | 日御碕、神社、灯台 | ○ | ○ | ○ | 雪國西端の一大偉観なり |
| 3 | 明治 45 | 山陰鉄道名勝案内 | 奥原福市（碧雲） | 日の岬燈臺 | 神社、灯台 | ○ | ○ | ○ | 西雲第一の偉観なり |
| 4 | 明治 45 | 山陰名勝乃菜 | 今村一城 | 日御碕神社 | 神社、文島、灯台 | ○ | - | - | - |
| 5 | 明治 45 | 島根県産業案内 | 島根県内務部 | 日御碕燈臺 | 神社、文島、灯台 | ○ | - | - | 一偉観たるを失わず |
| 6 | 明治 45 | 新撰名勝地誌 巻 8.9 | 田山花袋 | 日御岬燈臺 | 日御碕、神社、灯台 | ○ | ○ | ○ | 雲州西端に於ける一大偉観に推すべし |
| 7 | 大正 1 | 出雲名勝案内写真帖 | 加藤伊蔵 | - | 神社、灯台 | ○ | ○ | - | 雄偉壮大なる光景は筆紙の及ぶ処でない |
| 8 | 大正 3 | 鉄道旅行案内 | 鉄道院 | - | 神社、灯台 | - | - | - | 存在のみ |
| 9 | 大正 4 | 日本一周 中編 | 田山花袋 | - | 神社、灯台 | ○ | - | - | - |
| 10 | 大正 4 | 鉄道旅行案内 大正 4 年版 | 鉄道院 | 出雲今市 | 神社、灯台 | - | - | - | 存在のみ |
| 11 | 大正 5 | 鉄道旅行案内 大正 5 年版 | 鉄道院 | 大社 | 神社、灯台 | - | - | - | 存在のみ |
| 12 | 大正 6 | 鉄道旅行案内 大正 6 年版 | 鉄道院 | 大社 | 神社、灯台 | - | - | - | 存在のみ |
| 13 | 大正 7 | 大日本名勝史蹟 | 高木斐川、原坦嶺 | 日御碕神社 | 神社、灯台 | ○ | ○ | ○ | - |
| 14 | 大正 7 | 鉄道旅行案内 大正 7 年版 | 鉄道院 | 大社 | 神社、灯台 | - | - | - | 存在のみ |
| 15 | 大正 10 | 島根県名勝案内 | 奥原福市 | 日の岬燈臺 | 神社、灯台 | ○ | ○ | ○ | 西雲第一の偉観である |
| 16 | 大正 11 | 島根県名勝誌 | 大竹翼 | 日御碕燈臺 | 神社、灯台 | ○ | - | ○ | - |
| 17 | 大正 13 | 鉄道旅行案内 | 鉄道省 | 出雲今市 | 神社、灯台 | - | - | - | 存在のみ |
| 18 | 大正 13 | 出雲案内 | 全山陰誌刊行会 | 日の岬燈臺 | 経島、神社、灯台 | ○ | ○ | ○ | 西雲第一の偉観である |
| 19 | 大正 13 | 島根県案内 | 島根県 | 日御碕燈臺 | 神社、経島、灯台 | ○ | ○ | ○ | 眺望廣潤風景雄大である |
| 20 | 大正 13 | 出雲案内記 | 三宅孤軒 | 日の岬燈臺 | 経島、神社、灯台 | ○ | ○ | ○ | 西雲第一の偉観である |
| 21 | 大正 14 | 山陰鉄道案内 | 小松原真琴 | - | 神社、経島、灯台 | ○ | ○ | ○ | 眺望廣潤、雄大の景筆紙に蓋し き勝地 |
| 22 | 昭和 3 | 大日本百科全集 第 1 | 誠文堂 | 出雲大社 | 神社、灯台 | - | - | - | 存在のみ |
| 23 | 昭和 5 | 山陰の旅 | 山陰の旅社 | 出雲大社 | 神社、経島、灯台 | ○ | - | - | - |
| 24 | 昭和 5 | 鉄道旅行案内 | 鉄道省 | 杵築の海濱 | 神社、灯台 | - | - | - | 存在のみ |
| 25 | 昭和 6 | 日本名勝旅行辞典 | 日本旅行会 | 出雲大社 | 神社、灯台 | - | - | - | 存在のみ |
| 26 | 昭和 9 | 日本案内記 中国・四國編 | 鉄道省 | 日御碕燈臺 | 神社、灯台 | ○ | ○ | - | - |
| 27 | 昭和 10 | 近畿中国四国名勝案内 | 大阪鉄道局 | 日御碕神社 | 神社、灯台、経島 | - | - | - | 存在のみ |
| 28 | 昭和 10 | 中国・四国・九州旅行案内 | 三省堂旅行案内内部 | 大社線 | 神社、灯台 | ○ | - | - | - |
| 29 | 昭和 11 | 全名勝温泉案内 | 松川二郎 | 稲佐濱・日御碕 | 日御碕、神社、灯台、経島 | ○ | - | - | - |
| 30 | 昭和 11 | 松江市案内 | 有田伝助 | 日御碕神社 | 神社、灯台 | - | - | - | 存在のみ |
| 31 | 昭和 11 | 全日本旅行案内 昭和 11 年版 | 中西芳朗 | 日御碕燈臺 | 神社、灯台、文島 | - | - | - | 東洋一 |
| 32 | 昭和 12 | 島根県案内誌 | 国粋新聞社 | 日御碕燈臺 | 神社、灯台 | ○ | ○ | - | 雲州西部の偉観である |
| 33 | 昭和 13 | 全国名所めぐり | 小林鶯里 | 出雲 | 神社、灯台 | - | - | - | 存在のみ |
| 34 | 昭和 13 | 山陰地方 | 日本旅行協会 | 日御碕神社 | 神社、日御碕、灯台、経島 | ○ | ○ | ○ | 無比の偉観といはれてゐる |

に至つては、禿筆の及ぶ處にあらず。實に、雪國西端の一大偉観なり。」と、灯台からの眺めを称賛する内容となっている。こうした内容はその後の案内書においても継続して記述されている。

c) まとめ

出雲日御碕灯台では、最初の案内書から灯台が見出しとして用いられていることから、当初から周辺地域での位置づけが高かったと考えられる。ただ、灯台が見出しになる場合には、必ずその前に日御碕神社の見出しと記述があることから、野島埼灯台のように岬を代表するまでには至っていないといえる。

また、その景観認識は、初点灯時期が遅いため最初の案内書から岬端に灯台が立つ姿として捉えられていたが、岬の地形形状もあってか、他の二つの灯台ほどには荒々しい岩や波しぶきのなかに立つ姿として捉えられるようには変化しなかった。むしろ日御碕灯台では、灯台からの眺めがたびたび称賛されており、視点場として認識されていたのではないかと考えられる。

(5) まとめ

3ヶ所の灯台について分析した結果から、まず灯台が

注目されるようになったきっかけとしては、灯台周辺になんらかの紹介すべき場所があり、それに付随する形で灯台も紹介されたからだと考えられる。そうした場所としては、磯巡り（犬吠埼灯台）や日御碕神社といった明治以前からの名所や、海水浴といった行楽地、地理的な特徴を持つ岬が挙げられる。この地理的特徴については、野島埼が安房国や房総半島の最南端、犬吠埼が本州最東端であることが初期の案内書にはたびたび記述されており、周辺に強力な名所が存在しない野島埼が取り上げられていたのは、この理由が大きかったと思われる。

また 2 章で明治末期以降になると案内書にいずれかの灯台が必ず掲載されることを指摘したが、この時期と灯台が視対象として捉えられるようになった時期がほぼ一致することから、風景的な記述が読者の想像を膨らませることにつながるかと判断されたことによる可能性がある。

また灯台の景観認識の過程としては、以下の 3 つの段階があったと考えられる。日本で最初の灯台が初点灯してから 35 年くらいの間は、そこでは灯台はあくまでも海上交通の安全を支えるものとして認識されており、灯台を風景としては捉えていなかった。それが明治 30 年代後半になると、灯台が視対象として捉えられるようになる

が、ただその最初は、単なる塔や、伝統的な風景である白砂青松との関係、また岬端との関係で捉えたりと、風景の見方は必ずしも固定されていなかった。しかし、次第に岬の突端で荒々しい岩や波しぶきのなかに立つ灯台という見方が定着するようになり、この結果、昭和に入る頃には灯台を擬人的に捉えることにもつながった。

ただし野島埼や犬吠埼のように滑らかな海岸線から突出する岬ではない日御碕では、岬自体の描写が少なく、岬の突端で荒々しい岩や波しぶきのなかに立つ灯台という見方がそれほど顕著ではなかったことから、そうした見方が定着するためには岬自体の地形が大きくかかわっているのではないかと思われる。

4. おわりに

本研究の成果は以下のとおりである。

- ①明治期に建設され現在広く認知されている灯台について、当時の案内書における記述の有無を整理した結果、掲載数が多かった上位3位の灯台は、犬吠埼灯台、日御碕灯台、野島埼灯台であることを示した。また、その掲載傾向として、明治末期から必ず案内書にいずれかの灯台が紹介されることを示し、その背景には灯台が風景として認識され始めたことが影響している可能性を指摘した。
- ②灯台が注目されるようになったきっかけは、その周辺の名所と結びついたことによるものであり、その後、案内書で紹介されることを繰り返すことで、灯台の景観認識が定まっていっただことを指摘した。
- ③灯台の景観認識には、灯台の存在理由の認識（未風景）、塔への置換や、伝統的な風景や立地地形との組み合わせといった試行錯誤（風景の発見）、厳しい自然環境との対比（風景の定着）という3つの段階が存在することを指摘した。さらに、最後の段階が灯台を擬人的に捉えることを可能にしたことも指摘した。

今回の研究では、景観認識の過程を把握することはできたものの、なぜ明治末期に視対象として捉えられるようになったのかまではわからなかった。おそらく、ここには当時の社会背景などが関係していると考えられ、そうした点にも踏み込むことが重要だと考えられる。

また、岬の形状が灯台の景観認識に影響を与えていることは推測できたものの、その具体的な関係性を考察するには至らなかった。風景的な観点から地形が構造物に与える影響を把握することは灯台に限らず重要であり、岬の形状が異なる灯台における比較検討も必要だと考える。

参考文献

- 1) 海上保安庁燈台部：日本燈台史，燈光会，1969
- 2) 阿瀬真由香，藤岡洋保：D.&T. スティブソン仕様書とR.H. ブラントンが建設した灯台，學術講演梗概集，F2, pp.617-618，2003.
- 3) 大槻達夫，桜井慎一：地域的視座からみた灯台の役割に関する研究，學術講演梗概集，A-2, pp. 399-400，2008.